

ガイアの伝言 — 龍村仁の軌跡

濁川孝志

『ガイアの伝言——龍村仁の軌跡』に寄せて

俳優 榎木孝明

正直なところ、龍村仁監督はあくまでも表現者として「ガイアシンフォニー」の作り手であつて、決して出演者にはならない人だと思つて来ました。しかし監督を主役にしたこの本で監督の生い立ちを知ること、監督が「ガイアシンフォニー」に行き着くべくして行き着いた理由が明確になり、少々見方が変わりました。とりわけ映像の編集に見られる他の誰にも真似の出来ない鋭い感性は、監督の育つた時代と環境から培われたものだとな納得させられました。

現代人が科学の発展に伴う便利さと引き換えに失つてしまった五感の繊細さと第六感を、「ガイアシンフォニー」の全編が私たちに優しく教え諭してくれます。それはまさに監督ご自身の持つ感性の賜物だったということを、この本は教示してくれます。

時代の節目には、次の新しい時代への橋渡し役が必ず登場します。明治維新の時の西郷隆盛のごとく。そんな時代の先駆者たる資格は、私心を捨てて艱難辛苦をもとも思わない強い精神力の持ち主であること。そして、そんなことすら微塵も気にかけない人物であること。私はそんな人物に龍村監督をダブらせて来ました。

物質文明から精神文明の時代への架け橋としての役割を、「ガイアシンフォニー」は見事に果たしてくれています。龍村監督の人物像をここまで深掘りしてくれた濁川孝志先生に感謝いたします。「ガイアシンフォニー第九番」の完成、それをもってこのシリーズが完結することが、すなわちそのまま新しい時代の始まりだと私は思います。この大きな功績を称えられても、物言わぬ少しはにかなだような龍村監督の笑顔が私には見えます。